

【小野小町】生没年不詳。9世紀の人か。系図に諸説あり、小野<sup>たかむら</sup> 篁の孫とも伝わる。平安時代前期の女流歌人。六歌仙、三十六歌仙の一人。作品は『古今和歌集』に18首、『後撰集和』4首以下、勅撰集に60数首。深草少将の百夜通い（『通小町』）など、薄情・驕慢の美女として逸話も多し。美女盛衰説話ともいべき落魄の物語を生む。（『卒塔婆小町』『草紙洗小町』『関寺小町』『雨乞小町』『清水小町』『鸚鵡小町』など）

日本史上でも最も有名な人物の一人で、絶世の美女と称えられますが、その実在を巡っては諸説紛々の様相です。小町伝説の概要を下記に整理しましたが、他説も数多くあります。

出生	出羽国〔宮城県雄勝町小野〕、大同4（809）年～天長2（825）年頃か？
父	出羽国郡司の小野良実（小野篁の子）の娘・比右姫か？ 小野篁の子？
宮中へ	15歳前後。五節の舞姫(新嘗祭行事)の一人に選ばれ、美貌が評判となる？ 「天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ をとめの姿 しばしとどめむ」の歌はこの舞姫を見て、僧正遍照が詠んだ。 紀貫之は、古事記に登場する衣通 <sup>そとおし</sup> 姫に例えて賞賛。（『古今和歌集』仮名序）
小町の名前	道康親王（仁明天皇の第一皇子）の更衣 <sup>こうい</sup> （女御 <sup>にようご</sup> ではない）となるが、親王には既に更衣の三条町(後の后)が居り、区別のため「小町」と呼ばれた？
仁明天皇	小町の最初の男性か？・・・男性遍歴伝説の始まり
艶聞？	在原業平・文屋康秀・良峯宗貞(僧正遍照?)・惟喬親王・藤原敏行・凡河内躬恒・安倍清行・小野貞樹らと歌の遣り取り。雲林院での歌会がサロンとなる。
宮中を出る	仁明天皇崩御（嘉祥3年・850）後、山荘での生活が多くなる？ 隠棲？
著名な歌	花の色は うつりにけりな いたずらに 我身世にふる ながめせしまに
深草少将	良峯宗貞か？ 「想いを遂げたいのなら、百日間通ってください。」と言われ、小町のもとへ百夜通いをしたが、99日目に亡くなった？
辞世の句？	いつとはなく かへさはやなん 仮の身の ひとつのいろも かはりゆくなり 九重の 花の都に住ませで はかなや我は 三重にかくる (妙性寺縁起)
享年	69歳？ 70歳？ 70歳過ぎ？ 90歳過ぎ？ とにかく諸説あり。
仕えた天皇	仁明・文徳・清和・陽成・光孝の5代？（在位期間833～887、通算54年）
終焉地？	東国の荒野を旅する業平が歌の声を辿ると、草むらの中に髑髏を見つける。髑髏の目の間からはススキが生えていたという。（『古事談』）

※衣通<sup>かる おおいらつめ</sup>姫・・・軽の大郎女（第19代允恭天皇の寵妃）のこと。肌が白く、衣を着ていても透き通るように美しかったようです。それが災いして、哀しい運命を辿る人物です。

※更衣・・・本来は天皇の身の世話をやく役目。後に側室と同義となるが、正式な后候補である女御に比べると位が劣るが、母方の氏素性が優れていなくても抜擢は可能。

「？」マークばかりで驚きますが、自己流の荒唐無稽な推理推測を試みてみました。

- ①出自は朝鮮半島からの渡来系氏族で、東北地方（出羽国）に亡命移住した。
- ②何代かのうちに、小野氏一族と姻戚関係（養子縁組）を持った。
- ③小町には、複数の姉妹が居た。そして、姉妹はいずれも美しかった。
- ④時の権力者・藤原良房と小野篁が和解。篁は配所から帰朝し、小町は良房の縁者となる。
- ⑤良房の意を受けて、宮中における密偵（スパイ）となる。美貌と歌才が大いに役立つ。
- ⑥仁明天皇を含め、艶聞は当たらずとも遠からず。但し、結婚をせず、子も為していない。
- ⑦宮中から身を引いたといっても、都からさほど遠くない所に住まいを移した。
- ⑧深草少将の時は病气（流行の疱瘡）であった。幸い落命しなかったが、容貌は衰えた。
- ⑨藤原基経(良房の養子)が権力を握った時点で、出羽国または故地（朝鮮半島）に帰った。そして、極め付きの推測が次の10点目となります。

⑩『竹取物語』の主人公、かぐや姫の話の素材となった。

【独断と偏見に満ちた解説】

小町的美貌と歌才は、出自の好影響であろう。渡来系亡命人の血筋ゆえに教養も高かったはず。東北地方に多い色白美人の血も引いたかも？ 姉妹が居たために、伝説が輻輳・混乱した。小野篁直系ではないにしても、小野氏と姻戚関係を結び、系図に記されることに。篁は遣唐副使の時に大使・藤原常嗣と対立し隠岐配流となるが、良房の代になって和解。帰朝を許され、その後は密約に従い、いわゆる検察畑で活躍し、大昇進することになる。なお、この際には、小町の存在が大きくものをいった。

歌の贈答は小町の情報収集活動の一環で、中枢から外された不満分子らが対象であった。艶聞や男性遍歴は、小町一流の操縦術で、寄らず離れずといったところか。密偵であるだけに、婚姻はままならず。そのうちに、在原業平は不満の矛先を改め、小町とともに良房の協力者となったので、栄進を果たす。

深草少将には小町も弱り果てた。病を得ており時間稼ぎをするほかはない。容貌は衰え老醜さへ曝す。それでも通い続ける少将に対して、あと1日で100日に達しようかという際には、さすがの小町も妖しい胸の高まりを覚えたかも知れない。しかし、少将は亡くなった。

基経の代になると小町の役目は終わった。人を遠ざけた分、頼るべくは故郷(故地)でしかない。東国へ向かったであろう。あるいはさらに、朝鮮半島へと渡ったかも知れない。

さて、極め付けの話題は、少しばかり説明が必要です。まずは「かぐや姫」の要点から。

【かぐや姫】西暦 900 年頃成立した、日本初の仮名書物語『竹取物語』の主人公。

作者は、源順との説あり。異説として、菅原道真の名も挙がる。

五人の貴公子から求婚されるが、難題を与えて嫁さず。帝の求愛も成就せず。

後に、月よりの使者が迎えに現われ、翁夫婦の嘆きをよそに月に帰って行く。

『古事記』には、開化天皇の孫・大筒木垂根王とその娘・<sup>おおつきたりねのみこ</sup>迦具夜比売命が登場。<sup>かぐやひめのみこと</sup>

こちらも絶世の美女と称えられ、男からの求愛にも傾かず、難題を与える件などそっくりですね。小町伝説が物語の素材になったような気がしてくるのです。

大筒木垂根王は、現・京都府京田辺市あたりの村々の長で、「竹取の翁」に相当する人といわれます。「筒」は竹を、「垂根」は竹の根を示すらしく、竹との関わりが深いようです。一方、娘の<sup>おなべ</sup>迦具夜比売命は、『日本書紀』では第11代垂仁天皇の妃となっています。つまり、迦具夜比売命は、それなりの地方豪族の娘という感じです。また、<sup>おなべ</sup>迦具夜比売命は袁那弁王を産んだ(『古事記』)ことになっていますが、『垂仁紀』という書の中では見当たりません。

ところで「つつき」という地名ですが、第26代継体天皇の「<sup>つつきのみや</sup>筒城宮」に登場し、今の京都府綴喜郡の元の地名だといわれています。この辺りは竹の名産地でもあり、京田辺市では、「かぐや姫伝説の町」と銘打って町興しが盛んです。因みに、近くの同志社大学田辺校地には、筒城宮伝承地が在りますよ。

さて、かぐや姫ですが『竹取物語』の中で大きく2つの話題が描かれています。ご存知とは思いますが、念のために申しますと、①求婚に対して難題を与えられた5人の貴公子がことごとく失敗するという話と、②かぐや姫が(再び)天上に帰っていくという話、でした。

このことに関して、江戸時代末期の加納諸平なる人が『竹取物語考』を著し、その中で5人の貴公子は、<sup>いしつくりのみこ</sup>石作皇子・<sup>くらもちのみこ</sup>車持皇子・<sup>あべのみうし</sup>右大臣阿倍御主人・<sup>おおとものみゆき</sup>大納言大伴御行・<sup>いそのかみのまる</sup>中納言石上麻呂であると推定しています。5人はすべて672年の壬申の乱(天智派×天武派)の勝利側(天武派)の功労者です。

さて、姫は貴公子たちに、下記のような難題を与えます。叶えてくれれば求婚に応じる、と。

石作皇子 さま:天竺にあるという仏の御石の鉢を持ってきてたもれ。  
 車持皇子 さま:仙人が棲む蓬萊という山に生える、根が白金、茎が黄金、実が白き玉の木の一枝を、  
 阿部御主人さま:唐にいる火ネズミの皮で作った焼けぬ衣を、  
 大伴御行 さま:竜の首にかかる五色に光る玉を、  
 右上麻呂 さま:つばめが子を産む時に一緒に産み落とす子安貝という錦の貝を、持ってたもれ。

あらためて読むと、とても実現しそうには無い依頼ですね。道教とか仏教とかの影響も色濃いです。5人の中で傑作なのは車持皇子という人でして、鍛冶工匠に頼んでイミテーションを造ってもらうのです。あとで偽物とバレて失敗してしまいますが、とてもリアリティがあって、微笑ましいくらいですね。

そうして全員が失敗し、ここで時の帝の登場となります。最終的には成就しませんが、姫は「不死の薬」を帝に残し、天上の世界に帰ってゆくのです。帝は、「姫に会えぬなら、もらっても意味がない」と嘆きます。そして、天上に一番近い、駿河に在る高い山の頂きで燃やすのですが、この山こそ「富士の山」なのです。霊峰富士は、かぐや姫伝説の舞台でもあったのですよ。

竹取物語は伝承・説話、道教や仏教の教えなどが渾然一体となっていて、最後の場面などは羽衣伝説のような趣きさえ漂います。この作者が『古事記』や『日本書紀』にも精通した人物となると、菅原道真説もあり得ますね。そういえば道真も遠い大宰府へ流れていきますが、皮肉な巡り合わせでしょうか。

少々回り道が長過ぎたので本題に戻します。かぐや姫と小野小町の共通点は下記の通りです。

- ①竹筒から透き通る黄金の光とともに産まれたのがかぐや姫、小町は肌の美しい衣通姫。
- ②言い寄る男性にも傾かず、難題を与えて、結局は一緒にならず。
- ③時の天皇からも求愛を受ける。
- ④遠い所(国)へ帰って行く。出自は元々、そういう所(国)であった。
- ⑤小町の棲んだ小野の里といい、かぐや姫の筒木の里といい、いずれも竹の名産地である。

どうでしょうねえ、下司の勘ぐりだと言われればそれまでですが、私には、小町は実在の人物であって、しかも遠い所(朝鮮半島とか中国など)からやって来たのだ、という気がするのです。

君島久子・百田弥栄子の両氏が、チベット説話『金玉鳳凰』を紹介されておりますが、中に「班竹姑娘」という一篇があります。5人の貴公子がとある女性に求婚する内容を含んでいて、『竹取物語』の貴公子の求婚話の運びと酷似しております。遠い国のようにありながら、やはり密接な関係がありそうです。

小町とかぐや姫とが異なるのは、特に最後の場面ですね。かぐや姫が美しいまま月へ戻るのに対して、小町は落魄の物語を生みます。日本では美しい女性に対するやっかみなのか、清少納言や和泉式部も落魄の生涯が、『無名草紙』や『古事談』に著されていますね。幸せの独り占めは許さないのでしょうか？

最後に、小町の歌を2首ご紹介しましょう。噂のあった業平と遍照との間で交わしたと伝わるものです。

岩の上に 旅寝をすればいと寒し 苔の衣を 我に貸さなむ 『後撰集』より

旅の途中、岩の上で眠ったらとても寒いので衣を貸して下さいな。……石上寺で僧正遍照と会った時の歌とされる。遍照は大胆にも、「一枚しかない衣を貸すと寒いので二人で寝ましょう」と返したとか。

みるめなき 我が身をうらと知らねばや かれなて海人の 足たゆく来る 『古今集』より

見る機会のない私が憂鬱な状態とご存知無いか、あなたは海人の足がだるくなるほど熱心にお通いになるのね。……在原業平の歌の後に登場するが、熱心に通う業平に向けた歌とのこと。